



【戯曲】

カゲロウの

ゆらめき



弦楽器イルカ



【キャスト】

キャスト：男（主人公）

アロハ（男）

アデージョ（女）

舞台上、特にセットなし。

舞台奥にカーテンのみ。

【とある、ビルの屋上】

舞台上、照明は暗いまま。

男が一人、上手奥から現れ、歩いてくる。

照明がゆっくり点く。男、舞台の中央、前方ギリギリで立ち止まる。

観客を見据え、圧迫するように、左から右へ、鋭い視線を送る。

しばらく、間。緊迫した雰囲気。何事か、観客が少し不安に思うくらい。

ゆっくり、つばを飲み込む。

ゴクン、という音。

男、眼を閉じ、前方の観客席にダイブするようにゆっくり傾いてくる。

中央奥のカーテンから、アロハを着た男登場。手にはコンビニ袋を持っている。

アロハ （控え目に）お兄さん、お尻見えてますよお！

男、突然声をかけられて、動きが止まる。しばらく、間。

男 え？（前を向いたまま）

アロハ 思いつめてるみたいだけど、カッコ悪いよお！

男、そのままの体勢で、ゆっくり自分の手を、尻に持っていく。前傾の体勢で、尻さする。

もちろん、ズボンは破けてないが、非常に間抜けな格好。

男、ゆっくり振り向く。

アロハ あ、ども（右手を軽い敬礼のように、指を二本立てて）

男 ...なに？

アロハ （急に明るく、たけしっぽく）ジャン！こんな人生の最期はイヤだ！飛び降りた瞬間、自分のお尻が丸出しかどうか、気になって仕方がない！（テレビっぼい笑い声流れる）イヤですね〜！（ころっと素に戻る）あ、あたしこういう者です。

アロハ、男との距離がだいぶあるにも関わらず、胸ポケットから名刺を出して何事もなく渡すしぐさ。

当然、名刺は全く届かない。

しばらく、間。

アロハ だから、こういう者ですって！

男 え？

アロハ えじゃないよ、ほら。（いらついで、名刺を自分の足元に落とす）これ！

アロハ、下を何度も指差して、急かすように、拾え、のゼスチュア。

男 （首を振る）いや、拾わない。

アロハ じゃ死にな。飛び降りた瞬間、大声で叫んであげるよ、（迫力ある大声で）
ファイトー、いっぱーつ！

男 ...なに？

刑事ドラマの、犯人自供シーンの音楽かかる。

アロハ （首を振り、優しく諭すように）無駄な抵抗はやめなよ。確かに、飛び降りる瞬

間、あんたみたいな自殺者は、みんな思うんだよ。もしかしたら、落ちるギリギリで、腕掴まれて、ぐいっと引き上げられて。（振り返る）見ると、そう、こぼれるほど白い歯、優しい笑顔で抱きしめてくれる。ああ、来てくれたんだね、ケイン。ごめん、待たせたね。そして二人、最後はあの瓶持って……

アロハ、ポケットからピン取り出し、観客にすごい笑顔で決めポーズ。目を細め、声を出さず口パクで、「ファイトー、いっば一つ!」。だが次の瞬間、急にすごい怒り出してピンを壁に叩きつける。

アロハ　それが無駄って言うんだ！ やめとけ、ケインに過度な期待すんのは！ 本人も迷惑だろうが！

男　……なに？

アロハ　（ころっと明るく）んで、どうする？（名刺を指差して）

しばらく、間。

男　……わかったよ。

男、仕方なく名刺を拾いに、アロハの方へ一歩踏み出した瞬間。

アロハ　私、全日本ドナーレピシエン、レピ、レピシレン？……ナンチャラふんちゃら協会の加藤です。

男　（立ち止まる）え？

アロハ　だから、全日本ドナーレピシエン、レピ、レピシレン？……ナンチャラふんちゃら協会。略して全ナ協。

男　なにそれ？

アロハ　全日本の全と、ナンチャラのと、協会の協で、全ナ協。

男　だからそれなに？ だいたい、全日本ドナーなんとか協会なら、むしろ全ド……

アロハ　（割り込む）わー！（大げさに慌てる）消されるぞ、見られてる！ この瞬間このやり取り、どっからか今も確実に見られてる、どっちか言ったらポプラの木の方角から、それ以上言っちゃダメ！ 版権的に！

男　いや、全ド……

アロハ　ばかー！ ポプラの木でぶったたくぞ！

男　なんで？

アロハ　いいから、とにかく全ナ協は、いろいろとワケありの人間を海外送って、大金持ちの人と、臓器をとっかえっこしたりなんだりするあれよ、つまり……

男　え？ つまり、臓器移植する協会ってこと？

アロハ　あ、説明上手。つまりそういうこと、そういう秘密結社、謎の組織なわけよ。

男　（やっとアロハの元に行き、名刺拾う）え、でもこれ、……電球代120円？

アロハ　あ、それさっき行ったコンビニのレシート。当り前でしょ。謎の組織が名刺なんか持ってどうするの？

男　え、だってさっき。

アロハ　いいのよ。とにかく、普通は借金とか、倒産とか、まあなんやかやで困ってる人のところ行って、説得するのさ、それで、電池を海外出荷して、お金持ちと内臓交換してもらって。ね？

男　…電池？

アロハ　そう、電池。あんたみたいな人のこと。電池を換えれば電球は何度でも点く

でしょ？ だから臓器あげる人が電池、もらう人が電球って業界用語。でもあれでしょ？ ありそうな謎の地下組織ランキング3位には入るでしょ。一位は地下カジノ、2位は地下格闘技って.....

男 (男、それには答えずに) 一つ、聞いていい？

アロハ なに？

男 そのアロハ.....

アロハ なに？

男なんで？

アロハ あ、あれか？ 謎の組織なら黒服で登場するのが当たり前って？ だから俺のこと、それを逆手にアロハ着ちゃってる奴って思ってる？ どうだこの発想、面白いだろって？

男 うん。

アロハ は、違うっつの。今非番だから俺。アロハが好きなただのおっさんだから今。コンビニに本物の電球買いに行った帰りだって。

男 それだけ？

アロハ そりゃそうだろ、だいたい光沢のある黒服着て、マイケル・ハットかぶった時点で、コントかミュージカル以外の使い道ねえって。あんた、自分の臓器狙われてるとでも思った？

男違うの？

アロハ ワケないじゃんそんな非効率なこと、わざわざ自殺するところ捕まえに行くなんて、ツチノコ取ると変わるんよ。それより、首が回らなくて困ってる人んとこ行って、説得したほうが確実でしょ、ビジネスなんだから、こうみえても営業マンだから、ノルマとかあるんよ実際。知らなかった？

男 知らない、地下組織だし。

アロハ だよねー。だから、人のアロハを笑うなってこと。

男 いや、笑ってない。

アロハ (無視して) ただね、おもしろいと思ったんですよ、あなたのこと、後ろから見て、いかにもだから。

男 いかにも？

【自殺の理由】

アロハ やりそうな感じだなって。アノ世、逝きまーす！って。だから、ちょっと見てみよ
うと思って。俺と契約できなかった連中がどうやって死ぬのか、その一端が
垣間見えれば、とね。それだけです。あなたが思うような危ない橋、俺渡れ
ないよ。この業界も、ある意味ルート営業だから。しっかり身元割れてる人と
こ毎週通って、お饅頭とか持参してさ、んで説得して、海外出荷してるだけだ
から。

男 はあ.....

アロハ だからいいよあなたは、逝きなさい、お先に逝きなさい、薄紅色の可愛い君に
おんななさい。さっさと飛び降りて、地面で、べっちょりと。

男 (うなだれる)

アロハ あら、黙っちゃった。わかったよ。したい？ 特別だよ？

男 え？

アロハ せっかくだから、最後にいい思いしたい？ 我々のシステムでね、つまり、海外
のお金持ちが内臓もらう代わりに、お金を出すわけ、そこから我々のマージン
を引いたものが、あなたの取り分。その金額の範囲内で、あなたは死ぬ前に
好きな夢を叶えられる。借金返して家族に楽させるとか、いい女はべらして
ハーレムしたいとか、できる限りお望みのシチュエーションをこちらで用意しま
す。本当は、あなたみたいによく知らない人にこんなサービスはしない。
だって、謎の組織がばれたら困るじゃん、正体明かして。

男 ああ.....

アロハ で、やるの？ やらないの？

男 いや、やるもやらないも、別に、夢ないし。

アロハ ないの？ なにそれ、ないから死ぬの？ なんで死ぬの？

男 (沈黙)

アロハ 黙秘？ そっか、そりゃそうだ、言いたくないよな、そんな理由、確かに。

男 いや、言いたくないワケじゃ.....

アロハ 仕方ないよ別に、俺も相談とかされても困るし、なんか、やり残したことない
の？ 女は？ 最近やった？

男 (動揺する)

アロハ やってないの？

男 いや、やるっていうか、そんな.....

アロハ なに、あれ？ もしかして？ そういう人？ 女、経験無い方の人？

男 別に、そういう.....

アロハ いいよ、わかった、じゃ、用意してあげる。たぶん今、電池の手取りで五百万
の物件あるから、ホテルとか女込みで五百万のシチュエーション用意してあ
げるから。どんなのが好み？

男 いや、女はいい、別に、そういうんじゃない。それは望んでない。

アロハ ...そう。じゃ、あれだ、宇宙行く？

男 宇宙？

アロハ 今ね、年に一度の歳末抽選キャンペーン中。臓器一個で一口、一人何口でも
応募できるんだけどね、グロい？ ただ結構これが応募多くてね。ちょっとみん
な夢見過ぎじゃない？ 中年過ぎたシンデレラじゃない？ もっと日ごろから堅
実に生きてれば、そもそもうちみたいなどに世話なることもないのにね。それ
考えたら、あたしんちも来年子供が小学校でさ、やっぱ地に足付けた商売じゃ

ないと、学校でもいじめられるよね。あんた、なんか新しい職とか知らない？

男 ...知らない。話も変わってるし。

アロハ あ、そうそう、宇宙で逝こうキャンペーン！の話ね。小型のロケットが今用意できるの。それも金持ちの取り計らいでね、電池にも最期いい思いさせたいって変わった人でね。臓器全部取った後、首から上だけロケットに乗せて、循環動体を維持するポンプみたいの付けて。理論的にはしばらく意識もつらいから、最期に宇宙から地球を見れるワケ。宇宙葬、どう？

男 どうって.....

アロハ いやなの？ じゃ、いいよもう、死にな。俺は別に止めないよ。だって死ぬときは死ぬ、生きるときは生きる、でも、結果は一緒、みんないつかは死ぬ。それだけでしょ？

男 (言い淀む)

アロハ はっきりしないね、じゃなんで死のうと思った？ それだけ聞かせてよ。

男 いや、どんなっていうか、大したことじゃないんで、別に言うほどのことじゃ、それに言うの好きじゃないし、人に不幸自慢するみたいで。

アロハ いいじゃん、言いたいんでしょ？ 今すぐそっから飛び降りて死なないってことはさ。

男本当に、大した話じゃないですけど、あの、生まれた時から親父が事業に失敗して莫大な借金があって、そのくせ親父一人女と逃げちゃって、おふくろは苦労して俺と妹を育ててくれたのに、俺の20歳の誕生日の前日に死んじゃって、一緒に酒飲もうって約束したのに、まあそれはホント仕方ないことですけど、(だんだん早口) んで妹は高校ん時できちゃった子供を今、一人で育てて、結局、俺が親父の借金とか妹の面倒を見てんですけど、それで会社もほとんど休みなくて、一日2時間くらいしか寝てないし、それで週6、多い時には週7で働いてて、でもそれは自業自得って言うか、やっぱりいい大学出てないし勉強もしてないから、あと最近出会った彼女が実は結婚詐欺で、虎の子の貯金取られて、もちろん騙された俺も悪いんでそれが自殺の原因ってわけじゃなくて、実は.....

アロハ ウエイ！ウエイウエイウエイ！ いや、それすごいよ、それ十分自殺の原因なるよ、ご飯茶わんで3杯くらい死ぬよ。なに、その上まだあんの？ びっくり箱、いや、不幸の玉手箱だよ。たとえるなら、ご飯と思ってお釜開けたら、え、イクラ？ って。うわあ、海の宝石箱や〜、ってくらいミラクル。

男 (首を振り、冷静に否定) たとえがごちゃごちゃしてて、わかりづらい。

アロハ (無視して) んで、実は何？

男 実はこの前、家帰って電気点けようと思ってコード引っ張ったら、コード切れて、プチって、電気つかなくて。

アロハ で？

男 それで、死のうって。

アロハ えー！ そんなことで？ どんだけ打たれ弱いって、あれか、台風には耐えられるけど、そよ風には弱い家？ (ピ〇オーアフターのナレーター風に) 「ご覧ください。台風ではびくともしないのに、そよ風ではナント、ボロボロです。これには匠も打つ手なし」って。ねえよ、そんな家！

男 いや、それは確かに原因じゃなくてきっかけだけど、プチンと糸が切れたって言うか。まあ、コードも切れたんですけど。

アロハ あー、うまいね、うまいこと言った。そういうこと、なるほどねー。あるあるあるある.....

アロハ、観客の方を向き、高跳び選手のように、観客に拍手を促すゼスチュア。

アロハ あるあるある（あまり拍手が来ないので、首をかしげて）……やっぱないみたいよ、お客さん乗ってこないし。

男 でも、もうよくわかんないですね。なんか死にたいって言うより、もういいやって。いや、知ってるんですよ、本当は、死にたいって思う理由は、理想の生き方ができてないから。理想通りに生きたくて、その思いが強いからこそ、思い通りに生きられないと、死にたいって思うワケで。

アロハ じゃどういうのが理想なの？ どうしたら生きていたいって思う？

男 夢、ないからな。

アロハ おっばいとか、どう？

【アデージョ 登場】

男 え？

アロハ おっばい、揉んでみたいと思わない？

男 ……そりゃ、揉めるなら。

アロハ だよね、さっきから芝居中もずっとおっばいばっか見てるしね。

男 (必死で) 見てない。なに濡れ衣着せてんすか。てかどこにおっばいあるんすか、あるなら見たいっすよ逆に。

アロハ ほら、あそこ (適当に壁を指さす)

男 え？ ないよ。

アロハ あそこは？ (反対側の壁)

男 いや、ないですよ。

アロハ んじゃあそこ。

アロハ、観客席の真ん中に座っている、赤いボディコンにグラサンかけたモデル風で、胸に風船を入れていると思われるほど異常に大きい女 (アデージョ) を指差す。注目浴びても、涼しい顔で座っている。

男 …でも、不自然じゃないすか、あれ。

アロハ 仕方ないじゃん。だってここで本物の観客いじったら、それこそ別んところから訴えられるから絶対。ま、とにかくおっばいで決まりね。

男 え、やっぱ待って！

アロハ (急に大声で) おっばいは！ (首を振り、男の肩を掴んで見つめる。そして、力強く頷きながら) 揉まれるためにあるんじゃない。揉むためにあるんだよ。

男 …わかんないです、その理屈。

アロハ (ころっと軽く) じゃ君、最近揉んだのいつ。

男 ……ないです、揉んだこと。結婚詐欺の彼女も、触らせてくれる前に逃げられたし。

アロハ くー、いちいち泣かすね、君は。揉ますよ、揉ませますともおじさんは！ んじゃちょっと待って、今連絡するから。(電話出す) あ、吉田さん？ 加藤だけど、うん、ちょっと急で悪いんだけど、今一人電池見つけちゃってさ、あ、ターゲットリストの顧客とは全然関係なくて、そう、Gランクの。飛び込み営業っていうか、飛び降りか？ ははは。そう、Cランク以下は会社から歓迎されないのはわかってんだけど、成り行きでさ。うん。で、至急用意してほしい資材があって、そうそういつもの、あ、フレーバーは巨乳でお願い、そうそう。(電話切る) あ、手配ついたから。

男 …なんか、普通の会社ですね。

アロハ そりゃね、食うために働いてるだけだからね。お、そしてご到着だ！ (観客の方を見ながら)

男 え、どこに？

アロハ 謎の組織舐めたらいかんよ、実はもう用意できてるよ、五百万円分のぼいんちゃんが。

アロハ、指を鳴らす。パチ。何も起こらない。ぱち、ぱち。手を叩く。ぱんぱん。何も起こらない。足を踏み鳴らす、どんどん。誰も何も起こらない。

アロハ あれ、おかしいな。(気づくゼスチュア)あ、そうか！

アロハ、すたすと男の前に行き、無表情で、突然男の頬を思っきり叩く。バチン。

男 (頬を押さえて) 痛ったい！ 痛った！

アデージョ (以下アデ) はーい、お・ま・た・せ！ (モンローウォークで観客席より、ゆっくり登場)

アロハ 待ったよー、びっくりしたよー！

男 なんで叩かれたの俺、今？

アデ (鋭く見下しながら) 痛み。

男 え？

アデ その痛みがいいのよ、わかる？ 幸せには、代償が必要な。だ・か・ら.....
(指で男の頬を突く)

男 ...あなたの大人の女性ってイメージが、すでにおばちゃんです。

アデ (すごい形相で、タンを吐くように) かー！ おばちゃん言うな！ 殺すぞ！

男 (怯える) ...でも痛いのか、そういうプレイも、俺好きじゃないですから。

アデ (ころっと軽く) あら、じゃどんなのが好きなの？

男 ...いや、それは。

アデ これね。(胸を差し出す) さ、揉みなさい。

男 え、でも.....

アデ 早く！ 500万の女の胸、揉んでみたいでしょ？.....早く！

男んじゃ。

男、モミモミする。

男 ...なんか、風船みたいすね、胸って。

アデ (つまらなそうな顔で) そうね。(間髪入れず、顔色一つ変えず、針で胸を突く。
風船割れる音。ぱん！)

男 いたっ！ てか何割ってんすか？

アデ 気づけよ！ 逆にこれ風船だろ、どう見ても。

男 そりゃそうですよ、だけど、失礼かと思ったんですよ、指摘すんのは。もしか
シリコンかもしれないって、それで手術に五百万円かかったのかなって。

アデ いいの？ あんたは五百万円分のシリコン揉んで死ねるワケ？

男 いや、死ねないですけど、でも、シリコンもどんなもんか、一回試してみようか
って、でもこれどこが五百万すか、風船揉ませといて。

アデ ふ、バカね、あんたがさっき揉んだ風船、ただの風船と思った？

男 え、じゃ、...え？

アデ そう、特別な、すっごいのよ。

男 特別って、素材が？

アデ (形相変わる、タンを吐くように) けっ、あんたも他の連中と一緒に、この粗チン
野郎！

男 (怯えて) すっごい言われた、関係ないこと……
アデ (無視して) これ、中。
男 中？
アデ 空気、膨らましたの、(右胸を指差して) オバマ。
男 えー！ ウィーキャンチャンジ？
アデ (左胸指差して) エリザベス女王。
男 えー！ グレートブリテンアンド、えと……
アデ (無視して) あんたは、あたしの胸を揉んだんじゃない。
男 ……ええ、もちろん、それは確かに風船を……
アデ 違う、あんたは、世界を鷲掴みにしたの。

アデージョ、拍手を観客に求めようとする。

男 (制止する) いや、胸揉ませてください。なにうまいこと言ったみたいな顔してん
すか、誰も望んでないっすよそんな大喜利。
アデ でも倍お金出せば、もっとすごいわよ。
男 誰ですか？
アデ 天皇皇后両陛下！
男 けいれーい！
アデ さらに倍出せば、プレミアもんもあるわよ。
男 どんな？
アデ (右胸を指す) ジョン・レノン。
男 想像してごらん？
アデ (左胸を指す) マイケル・ジャクソン。
男 ぼーう！
アデ しかもどっちも、死ぬ前の最期に吐いた息よ。
男 瀕死で風船くわえてって、何やらすんすか大スターに！
アデ ジョン・レノンなんて暗殺されてんのよ、どうやったかあたしが聞きたいわよ。
男 それ、詐欺じゃないですか？

【ハンドルを回して】

アデ まあいいじゃない。代わりに生乳揉ませてあげるから、ほら。早く！

男 ……でも、これ、どのくらいの時間ですか、揉み終わったら死ぬんですよ。

アデ 死ぬのイヤ？

男 そりゃね。でも……

しばらく、間。

男 やっぱ、もうよく分かんないや、生きるのも、死ぬのも、どうでもいい、わかんなくなっちゃった。

アデ そう……

男 （座り込む）なんか、わかんないっす。人生辛くないって言い聞かせて、今まで生きてきましたけど、もういいかなって。いや、辛くたって生きてはいけるんですよ。どんなことしても、這いつくばって生きていける。俺なんて、餓い殺しですよ。生きてれば休みなく働くから、生かさず殺さずで金だけ取られて。でもそれでも楽しいこととか、よかったなって思う時もたまにあるけど、でも、疲れちゃった。おっぱいも揉みたいけど、それで死ぬって考えたら、どっちでもいいです。

アデ—ジョ、突然、男の頭をぱつと胸に抱え込む。驚く男。

アデ ひとつだけ、いいこと教えてあげる。

男 ……はい。

アデ どっちでもいいなら、生きなさい。迷ってるなら、生きてみなさい。もちろん、辛いでしょ、苦しいでしょ、生きにくいでしょう。何もいいことは待ってないかもしれない。でも、どっちでもいいと思ったら、迷わず生きなさい。それはね、あなたの嗅覚が知ってるから。生きる匂いを。あなたの目が、耳が、体が知っているから。生きている色を、音を、感触を。私たちはみんな、生きていることしか知らずに、死んでいく。だから、生きていく喜びを少しでも知っている人は、それを覚えている。もう一度、味わいたいと思っている。それが、生きるということ。

男 ……はい。

アデ 生きなさい。いい？ 生きるの、何度でも。生きるのよ。

男 はい。

ぱち、ぱち、ぱち、ぱち……

後ろに立って見ていたアロハ、観客に向かって、拍手を始める。

拍手が大きくなっていくまで続ける。

おもむろに、役者三人、舞台中央に立ち、客に向かって、笑顔で礼。

男、ふと、真顔に戻る。

男 え、終わり？ なんか今終わりっぽい雰囲気じゃないですか？ いや、確かにいい感じでしたけど、でもこの拍手、アロハさんきっかけでしたよね、そんな演劇あります？ 終わりなんでここ拍手ですよー、って？ ってかなんか続きあるのかなって、みんな期待しちゃいましたよ、ね、（客に向かって）してたよね？ あ、そうだ、ハンドルってキーワードもまだ使ってないし。

アロハ いいんだよ、舞台には尺ってもんがあんだから。たとえばオムニバスコントの舞台だったら、だいたいこのくらいがちょうどいい長さじゃない？ ちゃんと考えてんの、そこら辺は。

アデ そうよ、キーワードなんて全部使おう使わまいが、要はやったもん勝ちよ。

男 そうっすか、まあ、そうかなあ？

アデ なによ、そんなにハンドル好きなら使えばいいじゃない、好きにすればいいじゃない、ほら、ほら（スカートから車のハンドル出す）。

男 え、どっから出してんすか？

アデ 女は子宮で考えんのよ！

男 え、子宮に入ってたんすか？

アデ 入るわけないでしょこんなの、バカあんだ？ 女は子宮で考えるって言ったの！

男 二回聞かされても、その頭の悪そうな女の格言みたいの……

アデ うっさい、ほら、ほら（ハンドルをぐいぐい男にくっつける）

男 あ、やめてください、なんすか、いや、くすぐったい、なに体になすりつけてんですか！

アデ 付くから、くっつくから！

男 やっつけじゃないすか、付くかこんなもん、付くワケないでしょ！

アロハ （急に激怒）付くわ！

男 え？

アロハ 付くんだよ、なんだよこれハンドルって？ つつまない小道具だな、こんなの映画に出来るわけないじゃん、コントでしか……

男 （制止して）わー！

アロハ え？

男 いや、なんかわかんないすけど、なんか、これ以上言ったら消されるって、なんとなく……

アロハ 空気読めてきたじゃん先輩！ わかってるって、ほら、小道具さん！ ガムテ！（小道具さん呼ぶ）

小道具さん、急いでガムテ持って来て、すぐはける。

男 え、ガムテで付けんすか？ そんな突貫で？

アロハ 舞台はガムテって相場が決まってんだろ、ガムテなめんな！

男 なめてない。そうじゃなくて、あ、いた、こわい、やめてい……

アロハとアデージョ、二人がかりで男をガムテでぐるぐる巻きにする。

アロハ いいから、じっとしてな、ほら、付いた。

男 確かに、付きましたけど。

アロハ 回してみ、ハンドル、回してみって。

男 でもこれ、車のハンドルですよ。

アデ スポーツカー仕様のね！（自慢げに）

男 そこ威張るとこすか？ なんか無駄にゴージャスさアピールしてる貧乏人みたいな……

アデ じゃフェラーリって書いてあげる、マジックで。（白いマジックを胸から取り出し、書こうとする）

男 やめて、ホントカッコ悪いから。

アロハ いいから回しな、早く。

男 はい、んじゃ（くるくる）

アロハ そう。

しばらく、くるくる回す、沈黙。

三人、ずっとハンドルをぼんやり見ている。

男 （気づいて）え、なんすかこの沈黙？ なんでおれが回してるのじっと見てんすか、
なんかリアクションないんすか？

アロハ ないよ、そんなの。ハンドル回したいって言ったのあんたじゃん。

男 違いますよ、指摘しただけですよ。

アデ （小バカにして）ふ、さぞかし楽しいんでしょうね？（急に怒って）フン、子供だましの
ハンドル野郎が！

男 っつか付けたのあんたらでしょ？ 俺だって体に変なハンドル付けたくない……

アデ しかもなにそのスポーツカー仕様、貧乏人がこれみよがしに！ フェラーリ？
カタカナで？ ぷっ、バッカじゃないの？

男 あんただろ、書いたのさっき！ …あ！（股の間をもじもじ）なんか、いや、急に、
あの、トイレに、尿意が……

アロハ ついに来たか。

男 え？

アロハ 効能だよ、このハンドルの。（雑学的に）おしっこ近くなるんだよねこれ。循環が
よくなんのかなやっぱ。

アデ （ちょっとうれしそうに）ね！ あたしもそう思った。

男 なに普通に納得してんすか、おしっこ今必要？ この舞台で？

アロハ （口調が急に穏やかになる）いいよ、じゃそろそろ始めようか。

男 え？

アロハ 人間はね、思い込みだけで血を流して死ねるんだ。聖痕、スティグマって知って
る？

男 ああ、聞いたことがあります、あの……

アデ 仕方ないわね、教えてあげるわ、キリストとおんなじところに急に傷ができて、
血まで流す、出血多量で亡くなる人だっているのよ。実際に霊的な理由か、
ただの自己暗示か、理由ははっきりわからないけど。

男 いや、おれ知ってま……

アロハ （男を制して）いいから、もういいから。人間は、思い込みで死ねる。君もそうだ、
このハンドルを止めたら、君は死ぬ。そう、本当に死ぬんだ。いいかい、こっか
らは本気の芝居だよ。（客席に）お客さんも、そう。本気で、思い込むんだ、この
ハンドルが止まったら、君は死ぬ。

しばらく、間。

【生きるということ】

アロハ 君は死ぬためにここへ来た、そうだね。

男 はい。

アロハ じゃ、いつこのハンドルを止めてもいいはずだ。

男 はい。

アロハ じゃ、任せるよ。生きるも死ぬも、君のハンドルさばき一つだ。

沈黙。くるくるくるくる.....

アロハ どうした、止めないのか？

男 いや.....

沈黙。

男確かに、そうですね、止められないです。

アデ なぜ？

男 いや、だって、さっきあなたが言ったじゃないですか、生きろって。本当に、そう思ったから、生きたいって。ここ最近、生きてるって実感なくて、ずっと働いて、疲れて寝るだけ。でも今日、ここで叫んで、笑って、久々に、本当に楽しいって、だから、死ねないですよ、こんな思いで、死ねないです。生きたいです、死にたくないです。でも生き辛いです、本当に。この世は生きづらくて、居場所がなくて、しにたい、いきたいけど、しにたい。

沈黙。くるくるくるくる、ハンドルが回る。

そのハンドルの回転に合わせて、オルゴールの「エリーゼのために」かかる。

♪びろびろびろびろー。

男 え？

アロハ (真剣な表情で)人はね、思い込みだけで、オルゴールになれる。

男 (首を強く振る) ない！ それは無理！

アロハ 無理じゃない！ 現になってるだろ今、びろびろって！

男 それは音響さんが鳴らしてるだけでしょ！

アロハ 音響さんとか言うな今、冷めるから、客が！ オルゴールの音、素敵！ って
一体となった客の心が冷めるだろ！

男 そこ感動してねえ誰も、むしろ興ざめだろ！

アデージョ、安心させるように、ゆっくり首を振りながら、男に近づく。

先ほどと同じ優しい笑顔で、その胸に男を抱く。

優しい、間。

男、驚きながらも、受け入れる。

アデ (胸に男を抱きながら、ゆっくり首を振り、低音で) おるげーる。(巻き舌)

男 は？

アデ だから、オルゴールじゃなくて、おるげーる(いやらしい巻き舌で)、ドイツ語で。

男 すっげえ憎たらしいそれ、まったく関係ない今、俺ドイツの話した？

アロハ もういいよドイツ語の話は！
男 俺じゃねえ！ もうわっかんねえ！

アデージョ、アロハ、雰囲気変わる。静かな口調。

アデ わかんないなら、生きてみなって。
アロハ そう、生きてみなって。
アデ （舞台の中央奥を指差す）あのカーテンの向こうに、行ってみなって。
アロハ あそこに何かがあるか、お前は知っているから。
アデ もう一度飛び降りたら、全てが終わる？
アロハ それはわからない。
アデ・アロハ お前は何度飛び降りた？ お前は何度飛び降りた？
男 なに？
アデ とりあえず、ここまでにしよう。引き伸ばしても仕方ないから。
アロハ もう時間がない。お前にも、みんなにも。
アデ・アロハ お前は何度飛び降りた？ お前は何度飛び降りた？

二人、声を合わせて上手と下手へそれぞれ退場。
舞台上には、男が一人残される。

男 え？

男、舞台中央にポツンと立つ。自分が一人だけ残されたことに、困惑し、観客を見つめ、居心地が悪そうに、気まずい表情で立ちつくす。
どうすればよいのか、どう考えれば良いのか、男も、観客も、不安になるくらい、長い間合いがある。
そして、観客も男も、同じように思案を重ねた後、語り出す。

男 もう、引き延ばすのは終わりにしよう。
何度も何度も、そう決意して、だが私はその度に、このビルから飛び降りた。
そう、わかっている、何もかも。
ここが、どこなのか。私は、何をしているのか。そして、あのカーテンの向こうに、一体何かがあるのか。
私はあの夜、ビルの屋上に上り、確かに、そこから飛び降りた。
落下の恐怖と高揚感に目まいを覚えながら私は、これで終わると思った。
だが眼前に、アスファルトの地面ではなく、大きな街路樹が迫ってくるのが見えた。大きな大きな、ポプラの樹だった（苦笑）。次の瞬間、衝撃とともに、意識を失った。
そして、ここに立っていた。それから、私は何度も、ここから飛び降りている。
しかし、飛び降りる度に起こるのは、同じことの繰り返し。落下、衝撃、そして、ここに戻ってくる。
そう、知っているのだ。私はまだ、本当は死んでいないことを。あのカーテンの向こうには、病室で眠る私がいる。そして、それを見つめる妹とその子供、他にも、少ないながらも私を心配してくれる、何人かの友人がいるのだろう。
もう一度飛び降りれば、今度こそ本当に、死ねるのかもしれない。だから最期に、私はこんな夢を見たのかもしれない。私の体が、心が、全身で生を渴望し、私の意識に、生きることを、呼びかけているのかもしれない。

だが、生き返っても、そこにはおそろしい絶望が待っているだけ。生き辛く、苦痛に満ちた現実打ちのめされるのだ。逃げたい、もう、終わりにしたい。だが、それでも……

もう、大丈夫。私は、生きようと思う。

この、カゲロウのゆらめきのような、くだらない夢から覚めて、照明が落ち、幕が下り、この舞台が終わっても、そこからまた続いていくであろう現実を、心の奥底で、もう一度味わってみたいと願う自分があるから。

だから、もう一度、いや、何度でも、愚かな私は、生きようと思うのだ。

男、ゆっくりと後ろを向き、中央奥の、カーテンの向こうへ、消えていく。

無人の舞台が、まぶしいほど明るくなり、そして徐々に暗転する。

F I N .

【補足】

お読みいただき、ありがとうございました。

もしこれを長くするとすれば、アロハとアデージョがいったいどんな人物なのか、どんな過去があって男の前に現れたのか、ある程度考えてはいますが、そこらへんの掘り下げが必要と思います。

あと、密かにキャストとしては、アロハは小村 裕次郎さん、アデージョは池谷 のぶえさんであて書きしてます。（本当に密かに、ウフフなキャスティングです）

自分はただ適当に個人で書いているだけで終わりなので、こういうのが（サークルとか学校とかで）舞台化されたらうれしいな、と思います。（ただ、この程度の戯曲は、プロの方なら何枚も上手ですけどね）

万が一ご興味を持たれた方がいらっしゃいましたら、ぜひともご連絡ください。

それでは、また、どこかで。

※2014年8月の追記

だいぶ時間が経ってしまい、原作？自体もまったく日の目を見ないため、あの本を読んでないと意味が通じないこの台本も、まさにお蔵入りの抹殺状態、黒執事ってか黒歴史です。でも黒も白も大事な歴史ですよ。ありがとうございました。